

行為の理由、生命倫理、内在主義と外在主義 ——安倍氏と伊勢田氏のコメントに対する応答¹

杉本俊介

蝶名林亮（編著）『メタ倫理学の最前線』（以下、「本書」）における私の担当箇所（杉本 2019）について、安倍里美氏と伊勢田哲治氏（以下、敬称は略す）からコメント（それぞれ本誌、33～49 頁および 3～10 頁）を受けた。本稿ではそれぞれに応答したい。

第 1 節、なぜ「道德の中心問題」を導入に持ってきたか

安倍は本書に対して「そもそもなぜメタ倫理学者たちが理由概念に注目するようになったのか」を明確にすべきだったとし、「「道德の中心問題」と理由についての論争との関係を明瞭にすることで解消できたであろう」と言う（本誌、34 頁）。

道德の中心問題と行為の理由の関係については、本書で私なりに答えたつもりである²。道德の中心問題から始めたのは、マイケル・スミスが〈行為の理由〉概念³に注目して規範理由と動機づけ理由を区別することで、どのように「道德の中心問題」を解決しようとしたのかを示したかったからだ（Smith を参照）。道德の中心問題を解くため、〈行為の理由〉概念に訴えなければならない。この点は本書でもトリレンマを二種類の理由で捉え直し、すべての命題が同時に正しいことがありうることを示したし、「「道德の中心問題」を通して、〈行為の理由〉概念に注目する意義と、規範理由と動機づけ理由の区別を紹介する」（杉本 2019、102 頁）と書いた。また、マイケル・スミスが規範理由の欲求基底説（後述）や動機づけ理由のヒューム主義の代表者であることも、この問題を取り上げた理

¹ 本稿は 2020 年 9 月 12 日（土）京都生命倫理研究会において行われた蝶名林亮編『メタ倫理学の最前線』（勁草書房、2019 年）合評会での発表に基づいている。評者である安倍里美氏、伊勢田哲治氏、そして会場の参加者に感謝申し上げる。

² 本書で私が紹介したのは、〈行為の理由〉概念をめぐる論争であって、理由概念全般ではないことは強調しておきたい。本書では第 II 部「現代メタ倫理学における 1 つのトレンド——「理由」の概念への注目」となっているが、これは私が意図したものではない。

³ 行為の理由（reasons for action）で 1 つの概念であることを示すため、以下、山括弧を使って〈行為の理由〉と表記する。

由である。もっとも、〈行為の理由〉概念に注目する意義は「道德の中心問題」との関連に尽きない。

安倍はまた、本書では「なぜメタ倫理学者たちが理由概念に注目するようになったのか」が明確にされていないと指摘する(本誌、34頁)。この点はそのとおりだったと思う。

そこで以下では、まずメタ倫理学での〈行為の理由〉が注目されるようになった背景を示す(第2節)。次いで、〈行為の理由〉概念に注目する意義をさらに示すため、生命倫理学の論争的な話題を取り上げる(第3節)。また、トリレンマの形式で表されるこの「道德の中心問題」だと、バーナード・ウィリアムズらの内在主義(後述)とクリスティーン・コースガードやジョン・マクダウェルらの外在主義の対立が見えにくい⁴。安倍はこの対立が「見かけ上のものに過ぎない」(本誌、41頁)と言うが、そうでなく実質的な対立であることを説明する(第4節)。

第2節、なぜ〈行為の理由〉がメタ倫理学のテーマになったのか?

メタ倫理学での〈行為の理由〉が注目されるようになった背景には何があるのか。1つには、1920年代から50年代における道德的義務と動機づけをめぐる論争がある。発端となったのは、Why be moral?問題に関するH. A.プリチャードの考察である。プリチャードはオックスフォード大学の教授就任講演「義務と利益」のなかでも「なぜ道德的義務に従うべきか」と問う(Prichard)。プリチャードによれば、義務に従うことが当人にとって利益だからだと証明しようとするプラトンやジョセフ・バトラーの試みは無視することができる(Prichard, p. 39、邦訳830頁)。そもそも利益を求めることは義務に従う適切な動機とならないからである。W. D.フォークはこの講演で取り上げられた問題を「義務」や「べき」と動機づけとの関係についての問題として捉え直し、その関係についての立場をそれぞれ「内在主義」と「外在主義」と名づけている(Falk)⁵。以降、メタ

⁴ 本書で断ったように、ここでの内在主義と外在主義はそれぞれ、内在的理由(internal reasons)のみがあるか、それとも外在的理由もあるかという規範理由に関する立場である(杉本2019、112~113頁)。道德判断と動機づけのあいだに内在的つながりがある／ないという立場も「内在主義／外在主義」と呼ばれるが、それらではないので注意してほしい。

⁵ ただし、私はWhy be moral?問題が動機づけの問題だとは考えていない(杉本2021)。

倫理学では、動機づけの内在主義と外在主義の対立が論じられることになる⁶。

ところが、70年代になり、トマス・ネーゲルが『利他主義の可能性』の中でこの論争に新しい概念を持ち込む。それが〈行為の理由〉である（Nagel, p.13、ただし亀甲括弧は引用者）。

倫理学と動機づけの理論のどちらを優先するのかという問題は、内在主義者にとって決定的に重要なものである。…とりわけ道徳的であるような行為の理由（reasons for action）というものが存在する。行為の理由が道徳の要請を表しているから、それは動機づけることができるのであって、動機づけることができるから道徳的に要請を表しているわけではない〔つまり、倫理学が動機づけの理論に優先する〕。

ネーゲルは、利他主義を解釈すると、我々を利他的な行為へと動機づける直接的な理由が見出せる、と論じる（Nagel, pp. 15-16）。私の理解では、これ以降、〈行為の理由〉が動機づけとともにメタ倫理学の中心的なテーマとなった⁷。

第3節、生命倫理学における〈行為の理由〉概念

メタ倫理学の〈行為の理由〉概念は、生命倫理学の医療資源配分をめぐる論争においても注目されている。たとえば、ジョン・ハリスは、公的医療制度から恩恵を受ける機会には私たち一人ひとりに平等に与えられるべきだとし、その恩恵を受ける長さや機会の大きさや質に応じて優先順位をつける功利主義に反対する（Harris 1996）。ジュリアン・サバレスキュは、これに反対し、功利主義を擁護しようとする（Savulescu 1998）。

⁶ 当時の論争については、W. K.フランケナが「最近の道徳哲学における義務と動機づけ」という論文でまとめている（Frankena）。

⁷ では、ネーゲルはこのアイデアをどこから持ってきたのだろうか。ジョン・ブルームによれば、理由概念は早くも50年代には、オースティン・ダンカン＝ジョーンズ『バトラーの道徳哲学』（1952）や G. E. M.アンスコム『インテンション』（1957）のなかで論じられているという（Broome, p. 28 n.1）。ネーゲルもこれらの著作からヒントを得たのかもしれない（cf. Nagel, p. 44 n.1）。

2人は、診療を受ける理由を等しくもつ人々には平等な配慮が与えられなければならない、という点では意見が一致している (Savulescu 1998, Harris 1999)。サバレスキュによれば、2人の違いは〈行為の理由〉概念の捉え方にある (Savulescu 1999)。ハリスは、理由の欲求基底説を前提とし、サバレスキュはそれに反対している (彼は価値基底説を支持している)。

理由の欲求基底説：行為者が ϕ する理由をもつのは、その行為者が自分で ϕ することでその充足に貢献するだろう何らかの欲求をもつ場合であり、かつその場合にかぎる (ただし、右辺によって左辺の理由を還元しようという意図がある)。

ハリスによれば、治療を受けたり求めたりする理由は最終的には、生きたい、生きて欲しいという私たちの欲求によって与えられる。一方、サバレスキュによれば、それは欲求でなく治療によってもたらされる望ましさ (価値) によって与えられる。本人にとって治療を中止する理由もそれに伴う悪さによって与えられる (Savulescu 1999, p.409、ただし下線は筆者)⁸。

終末期疾患で死を欲している多くの人々は死ぬ十分な理由をもつ。しかし、その理由は彼ら彼女らが死を欲しているからでなく、彼ら彼女らの苦しみの悪さ、あるいは境遇の悪さによって与えられる。

この論争について私自身の見解を表明するつもりはないが、生命倫理学のこうした論争的な話題においても〈行為の理由〉は注目されてきたということは強調したい。

第4節 内在主義と外在主義の対立は見かけ上のものに過ぎないか

本書では、上述した理由の欲求基底説を、理由の内在主義から区別した。ウィリアムズ

⁸ この対立は福利に関する欲求充足説と快楽説の対立にすぎないように見えるが、そうではない。理由の欲求基底説と福利の欲求充足説は区別されるべきである (Heathwood)。

は論文「内在的理由と外在的理由」でどちらの立場も支持している（だからこそ、両者は混同されてきた）。

理由の内在主義：ある行為者が ϕ する理由をもつならば、その行為者はすでにもつ動機づけから健全な熟慮の過程によって ϕ する結論にたどり着くことができなければならない。

理由の欲求基底説と価値基底説の対立は、理由が欲求に還元できるかどうかだった。また、理由の内在主義と外在主義の対立は、理由の必要条件に動機づけが含まれるかどうかにある。

本書で示したとおり、私は理由の欲求基底説とそれ以外の立場（価値基底説や非還元主義）の対立が、安倍が言うとおりに「両理論で「理由がある」ということによって異なるものが意味されていることによって引き起こされる、見かけ上のものに過ぎない」（本誌、21頁）かもしれないことを否定していない。そのうえで、この対立が「理由がある」をどう定義するかという話に終わらない可能性として、ジュリア・マーコヴィッツのアイデアを取り上げた（杉本2019、112頁）。マーコヴィッツによれば、それは「理由がある」が何を指すかという指示対象の対立でありうる。

そして、理由の必要条件をめぐる内在主義と外在主義の対立のほうは、実質的な対立として紹介した。すなわち、理由が還元可能であれ不可能であれ、その必要条件に動機づけが含まれるかどうかで対立している。

もちろん、本書で書いたとおり、欲求基底説からは内在主義が容易に導かれるかもしれない。逆に、価値基底説やそもそも還元主義をとらなければ外在主義が容易に導かれるかもしれない。つまり、内在主義と外在主義の対立が、実は欲求基底説と非還元主義の対立だったことがわかるかもしれない。

そして、安倍のコメントは、非還元主義から外在主義がどう導かれるかを示している⁹。

⁹ もっとも、非還元主義的な外在主義が「最新の研究全体の雰囲気表現として適切」（本誌、38頁）だとは思えない（ましてや「D.パーフィットの示した見解で一応の解決を見たのだから」

「理由がある」ことが「少なくとも1つ意義 (point) のある振る舞いであり理解可能である」(本誌、42 頁) という程度のことに過ぎないとすれば、動機づけられていないオーウェン・ウィングレイブにとっても軍人になることはその意味で理由があるだろう (本誌、46 頁)。たしかに、それは本書で紹介しておらず、「内容の偏り」(本誌、39 頁) があることを認める (ただ率直に言えば、その意味での理由が規範理由であるとは思えない)。もし、内在主義と外在主義の対立が、このような仕方ですべて欲求基底説と非還元主義の対立へと置き換わるものならば、それは再び「理由がある」ということによって異なるものが意味されていることによって引き起こされる見かけ上のものに過ぎない」だろう。

しかし、ウィリアムズらの内在主義とコースガードやマクダウェルらの外在主義の対立は、見かけ上ではなく、合理性の捉え方に争点がある実質的な対立だ、と本書で論じた (杉本 2019、116 頁)。少なくとも、それは欲求基底説と非還元主義の対立ではない。本書で紹介したように、外在主義者コースガードは還元主義側に立つからである (杉本、108~109 頁) ¹⁰。

以上の点をまとめると、次のようになる (表1)。

【表1】

(1) 理由の欲求基底説 vs.理由の非還元主義 (理由の意味をめぐる見かけ上の対立)
(2) 理由の内在主義 vs.理由の外在主義 (合理性をめぐる実質的な対立)

→安倍は、(2) の対立は実は (1) の対立だったとする。私はそうでないと考える。

(本誌、38 頁) というのは、私の印象と真逆である)。この点は最後に安倍との見解の相違として示す。

¹⁰ 安倍は、パーフィットら外在主義者が理由概念に注目したのは、合理性概念では複数の捉え方が対立し論争を引き起こしやすいからだと言う (本誌、41 頁)。だが、私の理解では、パーフィットも合理性の手続き的捉え方と実質的捉え方という観点から内在主義と外在主義 (パーフィットの言葉では「主観主義と客観主義」) を特徴づけている。(Parfit, Ch.3)。パーフィットが見せかけのものにすぎないとするのは、欲求基底説 (パーフィットの言葉では「分析的な主観主義」) とそれに反対する立場との対立である (Parfit, Ch. 3, Ch. 24)。

安倍は、私がウィリアムズ、コースガード、マクダウェルらの倫理学を中心にメタ倫理学に絞って〈行為の理由〉概念を考えすぎだと言うかもしれない。本書で書いたとおり、〈行為の理由〉概念は倫理学だけの話ではないからだ。最近（ここ 10 年くらい）は、メタ倫理学でなく、より広いメタ規範的な（meta-normative）探究や問いという言い方もされるようになった。

また、安倍と私とのあいだには以下の見解の相違があるのかもしれない（表 2）。

【表 2】

	安倍	杉本
規範理由概念は他の概念に還元可能か	No（非還元主義）	Yes（還元主義）
その必要条件に動機づけが含まれるか？	No（外在主義）	Yes（内在主義）
内在主義と外在主義の対立は実質的か？	No	Yes

安倍と私とのあいだにある見解の相違が、〈行為の理由〉を広くメタ規範上で考えるか、それともメタ倫理上に絞って考えるかの違いに由来するのであれば、それはそれで興味深い対比であるように思える。

第 5 節、理由が正当化と動機づけで存在論的ステータスを変えることは不自然か

伊勢田は、本書 122 頁について次の疑問を投げかけている（本誌、5 頁）。

動機づけ理由が正当化をするときには事実や事態であり、動機づけや説明をするときは心理状態になると考えるのは「不自然だろう」とあるが、これは著者自身の判断だろうか。「なぜその液体を飲んだの？」という問いに、問いの文脈によって「ジントニックだから」という答えと「ジントニックだと思っていたから」という答えの 2 通りがあるのはむしろ自然だと思うが。

これはマリア・アルヴァレスの主張である（ただし、アルヴァレスは「妥当でない」(implausible)という言い方をしており、不自然さに訴えて議論しているわけではない。この点は私の書き方がミスリーディングだった）。アルヴァレスによれば、まさに同じ理由が、ある文脈では行為を正当化し、別の文脈では動機づけや説明を与える (Alvarez, p. 34)。そして、ある文脈では事実であったものそれ自体が、別の文脈では心理状態に存在論的ステータスが変わってしまうのは妥当でないとする (Alvarez, p. 45)。

そしてアルヴァレスは、「なぜその液体を飲んでいたの？」の答えとなる理由も「ジントニックだから」といった事実であり、心理状態でないと論じる (Alvarez, p. 45)。心理主義をとりたくなる誘惑に対し、アルヴァレスが訴えるのは作用と対象の区別である。

「ジントニックだと思っていたから」と答えるときも、理由として挙げられているのは信じているという作用でなく、信じられる対象、つまりそれがジントニックだからという事実だと論じる。

文献表

Alvarez, M. *Kinds of Reasons: An Essay in the Philosophy of Action*. Oxford: Oxford University Press, 2010.

Broome, J. "Reasons." In R. J. Wallace, M. Smith, S. Scheffler, and P. Pettit eds. *Reason and Value: Themes from the Moral Philosophy of Joseph Raz* (Oxford: Oxford University Press, 2004), pp. 28-55.

Falk, W. D. "'Ought' and Motivation." *Proceedings of the Aristotelian Society*, 48-1 (1948): 111-138. [W. D.フォーク「「べき」と動機」(古川哲史訳)、セラーズ／ホスパーズ編『現代英米の倫理学 第4巻』(現代倫理研究会訳)、福村書店、1959年、839～872頁。]

Frankena, W. K. "Obligation and Motivation in Recent Moral Philosophy." In A. I. Melden ed. *Essays in Moral Philosophy* (Seattle: University of Washington Press, 1958), pp. 40-81.

Harris, J. 1996. "What Is the Good of Health Care?" *Bioethics* 10 (4): 269-91.

Harris, J. 1999. "Justice and Equal Opportunities in Health Care." *Bioethics* 13 (5): 392-404.

Heathwood, C. "Desire-Based Theories of Reasons, Pleasure, and Welfare." *Oxford Studies in Metaethics* 6 (2011): 79-106.

Nagel, T. *Possibility of Altruism*. Princeton: Princeton University Press, 1970.

- Parfit, D. *On What Matters*, Vol.1-2. Oxford: Oxford University Press, 2011.
- Prichard, H. A. “Duty and Interest.” Reprinted in his *Moral Writings*, ed. by J. MacAdam (Oxford: Oxford University Press, 2002), pp. 21-49. [H. A. プリチャード「義務と利害（抜粋）」（小泉仰訳）、セラーズ／ホスパーズ編『現代英米の倫理学 第4巻』（現代倫理研究会訳）、福村書店、1959年、797～830頁。]
- Savulescu, J. 1998. “Consequentialism, Reasons, Value and Justice.” *Bioethics* 12 (3): 212-35.
- Savulescu, J. 1999. “Desire-based and Value-based Normative Reasons.” *Bioethics* 13 (5): 405-13.
- Smith, M. *The Moral Problem*. Oxford: Blackwell Publishing, 1994. [マイケル・スマイス『道德の中心問題』（樫則章監訳）、ナカニシヤ出版、2006年。]
- 安倍里美、「理由で倫理学をすること」、本誌、33～49頁。
- 伊勢田哲治、「『メタ倫理学の最前線』全体について」、本誌、3～10頁。
- 杉本俊介 2019、「行為の理由についての論争」、蝶名林亮（編著）『メタ倫理学の最前線』（勁草書房）、101～126頁。
- 2021、『なぜ道德的であるべきか——Why be moral?問題の再検討』、勁草書房。